

---

# ギャルゲーの一部分っぽいの（テスト小説）

イチシキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ギャルゲーの一部分っぽいの（テスト小説）

### 【Zコード】

Z4145U

### 【作者名】

イチシキ

### 【あらすじ】

まあ、よくあるギャルゲーの一部分っぽいものです。

転校してきた高校一年生の男子が、同じ高校に通う一年生の女子に出会うだけ。

ここから恋が発展したりしなかつたりー、みたいな。

なんとなく。

本当になんなく、横道に入っていた。

駅までの通学路からは少し外れるが、時間的にはあまり変化はない。

むしろ地図で見た感じ、ショートカットできると言葉る。

「転校初日から何してんだろうなー」

とか呟きつつ歩いているとい

「…ん?」

女の子がいる。

何かの店の軒先で腕を組んで片手はあいこ、手をつむってなこせり思案しているように見える。

「何やつてんだ……あの娘……？」

少し近づいてみたといふ、その店は小さな駄菓子屋であることが分かつた。

まつたくもつてそれっぽいお婆さんが座布団に座り、店番をしている。

外装も内装もそーとーレトロだ。保証書叩き付けたいほどの天然記念物な駄菓子屋だ。

「…………」

真横に立つても女の子は微動だにしない。さつきからずっと同じポーズのままで固まつたままだ。

もしかするとよく出来た人形なんだろうか、と思つたがそもそもこんな所に立てる意味がない。

この狭い横道では進路妨害でしかありえないからだ。

ま、とりあえず声をかけてみることにした。

「あの……」

「つひやあううー?」

普通に声をかけただけだつてのに、女の子は電流でも流されたかのよつにはね上がつて、目を白黒させる。よほど驚いたようだ。

「あー……その、すまん。驚かせるつもりはなかつたつーか……なんといつか……」

とつたに弁明のような言葉が口をついて出る。

女の子は田尻に涙まで浮かべて鼓動を押さえよつしながりも、しつかりと首を横に振つた。

「い、いえ……突然のことで心臓止まりよつになつただけです。大事、ないです」

ふうー、と長い吐息。そして恥ずかしげにえへへ、と笑う。

つられてこつちも微妙な笑みを浮かべる。

（トントン）。

そんな風に少し笑い合つていたら、女の子が口を開いた。

「あの……もしかして、先輩さんですか？」

「ん？ ってことは君は一年生か？」

そーいやいつの学校は学年によって胸元のリボンの色が違つとかなんとか。

この女の子のリボンの色は青、つまり我が校の一年生といつわけだ。ちなみに、なぜか男子はそういった物が無い。

男女差別のような気がするが、その辺は大人の事情だらう。

女の子は再度微笑むと、ぴしりと敬礼もどき。

「一年E組の、かざおか 風丘 翠です。以後、どうかよろしくお願ひします  
です」

「俺は2年B組の、みながわ 皆川 総慈。ま、よろしくな」

自己紹介が済み、互いのことが分かつたとこで、ひとつ聞きたいことがある。

「ところで、わざわざから何を考えていたんだ? 声かけるまで気付かないなんてハンパじゃないと思つが」

「え? それはですね……」

わざわざから、と駄菓子屋の中には田を見やる風丘。俺もつられてそれを見た。

そこには飴玉やスナック、するめイカなどといった、どれもこれも数十円とこづ今時驚きの安さの素朴な駄菓子が沢山ある。

「む、まじか」となき駄菓子だ。駄菓子だけれども……

「で?」

「あ、はい。その、それなんですか?」

風丘がそれ、といつて指したものは、

「つめえ棒、か?」

「はー……おやつとして買って帰らひつたといひまでは良かった

んですか、何味にしようかなと悩み続けるのもつまらないなって……

……

ちなみに、うめえ棒とは、一本10円の典型的なスナック菓子で食べるトシヤクシヤク、とこうかサクサク、というかそんな感じな食感が売りの一品の駄菓子のことである。

色々な味があり、今風丘が手に取っている「たらじ味」「めんたい味」「ソース味」もそのひとつである。

「（つかし……微妙なチョイスだな……）」

7

「むむ……」私は私の人生においての一つの試練なのでしょうか  
…………

……まあ、色々ヒツツ「//」を入れたいが、それは置こうとして、

「みつづ黒えぱいいじゃん」

アホらし…と思いつつも、それが極力顔に出ないよう言つてやつた。

しかし、風丘はそれを聞いてびくり、と体を震わせた。

こちらを丸い瞳で見つめて、三本のうめえ棒を見つめて、しばり黙考して。

「そ、そんな手が……」

卷之三

俺、今どんな顔してんだろ……

風丘はそんな状態の俺に構わず、名案を実行に移して会計を済ませていた。

そして、ぐるりと振り向くと、熱っぽく上気した顔で俺の手を取り、ぶんぶんと上下に振る。

その感動に極まり、といった表情と行動に俺はドキリとさせられる。

「ありがとうございます、ありがとうございます！ センパイの助けが無かつたら私、ここで死ぬまで悩み続けて悩み続けてひからびて、するめの一本になつてどこの誰かさんにおいしく食べられてしま

「ついにやだつたかもしけなこのですよー。」

……ただ、頭の中身は少々のぞいてみたい気がする。

ま、礼を言われて悪い気はしない。

「まあ、氣にするな。困ったときはお互い様つて」と

「はあ……ヤンパイって情深いですねえ……」

今度は心底感心した風に、しみじみと言へ。

その前にやわらか手を離して欲しい。せつめいつまつて照れくわい。  
祈りが届いたのか、風呂は俺の手を離して、血ぬの両手をぱん、と  
打ち付けた。

そして鞄の中から何かを取り出した。

「はい、これはお礼の気持ちです」

「え? けど、それは……」

うめえ棒のソース味。さつも買つた奴の一本。

「……ここのか？」

「はい。ですからお礼です。受け取つてもうないと私が納得でき  
ないんです」

うめえ棒を受け取る。

「ありがとうございます、風丘

「いえいえ。あ、あとそれから私のことは、できれば翠と呼んで下  
さい」

「ああ。……それじゃ歸るかなつと、翠」

「はい」

にっこりと笑つて付いて来る。家は駅の近くらしいので、交差点ま  
で一緒になつた。

「じゅ、またな、翠

「はー、センパイもー！」

れよひなうあー、の声が徐々に小さくなる。

翠は俺の姿が見えなくなるまで手を振つて、後ろ向きに歩いていた。

……転ぶなよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4145u/>

ギャルゲーの一部分っぽいの（テスト小説）

2011年10月9日07時40分発行